

# 伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

阿蘇家と深い関わりにあった、色見・洗川。

昭和六十二年、洗川において「衣そそぎの神事」が執り行われました。

それは阿蘇家大宮司交代のおりか、六十年おきに執り行われるもので、今回は阿蘇惟之氏大宮司就任として執り行われました。

一の宮を馬にてたたれ、日の尾峠を超えられお越しいただきました。

私たちも鍋の平まで迎えに出ました。地区の古老が、この付近を「まいのはる」すなわち「舞の原」と呼称する意味を解したような気がしました。それはきつと鍋の平付近で、大宮司一行を出迎えた往時の人達が、舞い踊るその様子からの表現でしょう。

やがて一行は、色見川を渡る中原までやってきます。この地区の小字名は、「ぞうりぞん」すなわち「草履園」です。川を



▲「衣そそぎの神事」のようす

渡り、濡れた草履を取り替える所からの地名であります。

此処から約四キロメートル、なだらかな坂道が続きます。途中三キロメートル進行方向左手に「掛干」が見えてきます。「衣そそぎの神事」で用いた衣を掛け干す所です。今は小さな祠が残っています。

この掛干に住む人達が、洗川で最も古くからの原住民でなかったのではないかと、思われます。それは神事が執り行われる、妙見社すなわち洗川神社周辺の墳墓から、その形跡を見ることができます。

やがて大分、大友氏の流れをくむ後藤家一族がこの地に居を構えます。妙見社を発する水の流れに沿った一帯を住まいとしました。

洗川バス停の後ろから、すぐに根子岳が迫りくるような錯覚に陥り、連なる後藤家を通り過ぎると、妙見社すなわち洗川神社に着きます。バス停から十五分位の所です。

往時より、こんこんと沸き出すこの水が、阿蘇神話の一説になり、この外輪を越えた所に位置する、峰の宿と神話上深い関係になります。

祝詞に始まり、侍従がお持ちの麻生地を布を、湧き水に浸させます。

千数百年は続く、この巖かであり今までは雑談を交わしていた隣人と、いつの間にか口をつぐみ見入ってしまう、その表現が一番いいと思えました。その時間は三十分位だったかと思わ

れます。

衣そそぎの神事が終わると、馬に乗り「掛け干し」に向かいます。そがれた衣を掛け干すに一番適当な場所か、周りには木々もなく、この地では最も永く日が当たる所です。

「掛け干し」の神事が終われると、ゴザが敷かれ宴席が始まります。

この宴席をもって終了した衣そそぎの神事は、今は場所すらわからなくなった「紺地の池」での神事が残っています。最終的に紺地に染め上げる動作が残っております。

色見の地名もこの「紺地の池」での動作からきているのでしよう。

染め上げた衣の色を見る。その場所は白水であるのかも知れません。

日の尾峠を超えてお見えになる。それ以前は、白水からか、矢部浜の館からか、千数百年も経た今、場所を特定する事は難しくも、しかし濃紺、紫に似たこの色を尊しとする気質を育てたこの祭事は、やがて高森人の気概を産むに至ったのかも知れません。